平成13年度　学術研究助成報告

Pacific Creoles : Transcultural Hybrids In the Japan–America Diaspora

David B. Willis

Research（研究）: This research project was built on many years of research into Pacific Creoles, a hybrid community between the U. S. and Japan. In order to understand the importance of these people the research project was conducted. The results have been reported in various forums in Japan and the United States. Here I will provide a report of the theory behind this research, in order to help in understanding this project.

Theory（理論）: クリオール時代：国境を超えた日本とアメリカにおける、クリオール化（異種混淆）の理解について。閉ざされた存在である自分たちの文化の限界を示唆する。グローバル化と、それにともなう事象や現象は、第三開国時代のなかにある多くの日本人を不安にしています。これは、独特で純粋とされてきた日本の文化や社会、アイデンティティといったものが失われるかもしれない、といった緊張、不安、懸念が高まっているからです。移民、すなわち外国人居住者の文化が日本社会に浸透するなかで、新しいハイブリッドの形態やアイデンティティが現れ、より古く、より伝統的な文化と混在しています。日本とアメリカの文化は、この様にして、競合併存するようになってきました。前述した不確かさ、不安な心は一方でネオ・ナショナリストを台頭させ、他方では、文化の崩壊、つまり溶け込んでまとまりのなくなったグローバル化とみなす「あきらめの気持ち」をもたらしています。

私達がここで試みようとしているものは、日本とアメリカ社会・文化の

間で、最近盛んになってきた相互浸透に光をあてた全く新しい方法です。国境を超えた文化移植、文化変容のフロー（流れ）をテーマとした最近の重要な論説、並びに国際的な文脈のなかで世界的に知られた新しい社会化のイメージを予測している最近の研究が、私たちの理解を促進してくれています。私たちが現在、高度にインターラクテイブな世界に生きているということは周知の事実となりました。**Hannerz, Appadurai, Bhabha, Hall, Geertz, Matsuda** や、そのほかの研究者が報告しているように、このようなインターラクションの特徴は、実際のところ驚くほど多種多様性を示しています。日米関係の研究者の論説に欠けているものは、③国境を超えたインターラクションに参加している人々の本当の声や報告、②国境を超えた文脈、それに、③制度上、社会的、および文化的な変容のプロセスであります。

私たちが自分たちのプロジェクトで取り組んでいるものは、“結びつき”の現象や事象について、クリオール化という概念を使って分析することにあります。つまり、これは西欧化やアメリカナイゼーション、あるいはその他の地球規模のホモゲナイゼーション（均質化）、並びに、アシミレーション（同化）とは異なる現象です。私たちの文脈は、ボーダー、国境というひとつの考え方ですが、これは、文明と文化の隙間、世界化と世界の形成の隙間、地球規模のデザイン（構想）と地域独特の歴史の隙間から現れてきます。クリオール文化、および、クリオール化という言葉は、もともとはアフリカ系カリブ人の独特な混交と、ユニークな歴史的発展から生まれた言葉でありますが、これらの言葉は、アメリカと日本との間で起こっている異文化間の遭遇というテーマには一見すると馴染まないものです。しかし、この文化的なコンセプトおよび変化する文化のプロセスとしてのクリオール化のパワーは、日本とアメリカの遭遇を、新しいクリエーテイブな観点から見直すものとなります。

クリオールという言葉は、それ自体、クリエーションという言葉と同じ語源から成っています。言語学者はクリエール言語を具体的に研究していますが、彼らの学識は文化やカルチャーというものの検討を意図的に避けています。しかし、「クリオール」の意味を議論すれば、このコンセプト

がはっきりと浮かび上がってきます。カリブ海、西インド諸島からの意欲的で、影響力のある声であるクリオライトは、クリオールの多様な世界を認めようというこのような動きを端的にあらわしたものであり、クリオールネス、つまりクリオールであることのパワーを主張したものです。日米関係のプロセスを理解しようという試みには、極度に単純化されたバイナリーな抵抗、反対という制約に「つきまとわれて」います。このバイナリーな抵抗、反対は複雑で、豊富な連想であるクリオール化の現実を反映するものではありません。このクリオール化、つまり「共有された文化的価値の語法」によって、日米両社会の文化的関係をより深く理解できます。

私たちの文脈で何が違っているのかというと、混交の手段、クリオール化が現在おこなわれている方法のなかにあります。これは、もはや同化といえるものではありません。今やクリオール化は、新しい共有された文化、発生しつつある文化であり、その中心をなす価値には自由な民主制度、人権、さらに、オープンで積極的なコミュニケーションがあります。この日米間の共有された文化についての新しい、従来よりさらに広い文脈は、無制限で柔軟なものであり、とどまることがありません。これは、より一層不安定で、混沌としており、ランダムなものでもあります。こうした暗部も、クリオール化のなかに存在しています。しかし、この混沌としたものはクリエーションとみなすことができます。つまり、新しいものへの動きなのです。21 世紀の地球というスペースのなかで、文化的スペースと、さまざまな動きを照らし出しているものが、クリオール化のプロセスなのです。“本物”という孤立したスタンプを押された地域の伝統のなかで、もはや破壊されていない伝統など存在しません。私たちが日本および日本の社会をみるときに、このことは、理解するには特に難しいコンセプト（概念）です。日本人であっても、日本人でなくても、私たちは日本的なユニークさ、特異性、例外主義という言説に、あまりにも慣れてしまっています。しかしながら、私たちが「日本」だと考えているものは、よくみてみると、多様な文化要素の豊富な遭遇の結晶であることが理解できます。そして、それはよく吟味すれば明らかものもありますが、多くの場合、“純粋文化”というステレオタイプに隠されています。

私たちがこれまで日本だと考えていたものは、今、こうしている間にも、私たちの足元で「ゆらいで」います。日本の文化は、均質で強固なものや、静止したまま変化しないものではありません。日本では、「文化的」に行動する能力は、変化の可能性、すなわち、クリオール化の可能性を保証するものです。今では、研究者としての私たちの注意や関心を引くものは、静止したまま変化しないものではなく、変化そのものとなるのです。私たちは文化を巨大で複雑なひとつの永久的な社会装置としてみるよりも、むしろ川とみています。川の、渦巻や主流に逆らう流れ、時としてみせる早い変化や、遅く重々しい水の流れは、今、起こっていることについての的を得たメタファーなのです。川は、私たちに、文化についてこうした新しい視点をあたえてくれます。川の流れや川の変化は、あるときは予測できますが、あるときは予測できません。川は、私たちの視点を、動かせない構造物というよりもむしろ、流動性のプロセスに向けさせるものです。人間関係を変容するときに起こっているものは、もはやルール（規則）ではなく、アクション（行動）であります。このことは、文化的な行動、活動が大切であることを示しています。そして、この川という観点は、永久で不変であるという未来を、示唆しているのではなく、文化の暗黙の側面としての、変化をともなった目の前のものをさします。文化は、あたえられるものではなく、いつも、交渉されているものなのです。また、川の境界である堤防についていえば、境界は、何かが「留まる（＝止まる）」ところではありません。境界は、何かが始まるところです。

Japanese Students Abroad : Cultural Adaptation and Personal Growth

Teresa Cox

"Japanese Students Abroad : Cultural Adaptation and Personal Growth" is the theme of the research project which I have been working on since the 1998 academic year. This research examines the process of cultural adjustment and the overall effect of study abroad programs on individual Japanese students, using case study interviews (see Soai Ronshu 16 for a background on the study).

The goal of the project was to make some valid generalizations about cultural adaptation and personal growth of Japanese "ryugakusei" so as to betterunderstand the students' adjustment process, and allow comparison with the experiences of international students from other countries. Furthermore, it is hoped that the documented experiences of Japanese students who have studied in America, edited into the form of a training video, will provide insights and information helpful to future participants in study abroad programs.

The funds from this year's grant were used to begin the process of professionally editing portions of the interviews into a video documentary. The next step is to incorporate narration, music, and additional visuals such as campus scenes and film clips of American university life.

I would like to express my sincere appreciation Soai University for their support of this project, which I hope will have practical benefits for our students in the Soai Summer Program, the Year Abroad Program, and also for students studying abroad independently.

日本神話の記述的研究

橋本　雅之

助成者は、以下の二つのテーマを中心に本研究を進めた。

①「天」を中心とする古風土記の世界観と編纂思想

②現代言語芸術における神話的認識論

①の古風土記の世界観の問題は、古事記・日本書紀など他の上代文学の世界観を視野に入れて、作品論的な立場から考察した。

②の現代芸術における神話的認識論の研究は、井筒俊彦の東洋思想研究の共時的構造化の方法を援用し、唯識思想に代表される東洋的認識論の立場から、村上春樹・手塚治虫・山田洋次の作品を具体例として、おもに境界神の意味を考察した。

本助成研究に関わる平成13年度（平成13年4月から平成14年3月）の研究成果を以下に示す。

古風土記関わる研究成果

①『風土記を学ぶ人のために』世界思想社　平成13年8月刊（植垣節也と共著）

②「古風土記における「古」と「昔」」『風土記研究』26号　平成13年12月

③「古風土記の世界観と編纂思想」上代文学会秋季大会（於法政大学）平成13年10月（平成14年に『国語と国文学』に論文として掲載）

神話の認識論に関わる研究成果

①『サルタヒコの旅』創元社　平成13年10月（クロード・レヴィ＝ストロース、河合隼雄その他と共著）

平成 13 年度　研究成果刊行助成報告

『講読　歎異抄』の出版

新井　俊一

2001 年度予算に計上していただいた相愛学園出版助成により、2002 年 1 月に京都の永田文昌堂から『講読　歎異抄』を出版した。本書は、筆者が本学宗教部の事業の一環として 1998 年 4 月から 2000 年 5 月にかけて担当した「仏典講読のつどい」の集大成であり、相愛大学図書館および龍谷大学図書館、ならびに主だった真宗学・仏教学研究者と真宗信者に献呈した。

本書は学術書と言うよりも、一般向けの仏教（真宗）解説書であり、多くの読者から「分かりやすい」「読みやすい」との批評をいただいている。

『冷戦とアメリカ文学』

山下　　昇

2001 年 9 月に編著『冷戦とアメリカ文学』を世界思想社より刊行した。アメリカ文学会関西支部の中堅会員を中心に 13 名の執筆協力を仰いで、400 頁余の研究書を出版した。私は序と第 5 章を執筆し、編集の任を果たした。

このテーマでの研究書は本邦初ということで、『英語青年』、『世界文学』、『New Perspective』、『アメリカ学会会報』、『アメリカ文学研究』（掲載予定）の書評で取り上げられ、「本格的な冷戦文学研究」として高く評価された。

平成13年度　演奏会助成報告

斎藤　達男

- 演奏会タイトル　「斎藤建寛リサイタルシリーズ　Vol. 2」
- 研究の主旨　チェロ奏法の研究
- 日　時　2001年5月22日（火）
  於）ザ・フェニックスホール
- 主　催　斎藤達男
- マネジメント　大阪アーティスト協会

1999年頃よりリサイタルを開催することを考えていたが、より研究を深めるために一度きりのものではなく、数回にわたってシリーズで行う企画を思いついた。チェリストにとって重要なレパートリーとなっているJ. S. バッハ作曲の無伴奏チェロ組曲は全部で6曲ある。そこでそれらを毎回1曲ずつ取り上げ、他の楽曲と構成するというプログラムを思い立ち、全6回のリサイタルシリーズを開催することに決めた。リサイタルのサイクルは自分の研究のペースを何よりも中心に考え、観客動員に無理がないようにするなど考慮し、半年に一度、3年にわたる長期的な企画とした。

助成の対象となったのはシリーズ第2回のリサイタルである。第2回ではベートーヴェンの5曲あるチェロ・ソナタの中から2曲を選んでプログラミングを行なった。全体のプログラムは下記のとおりである。

1）L. v. ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第1番　ヘ長調　作品5-1
2）J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲第2番　ニ短調　BWV. 1008
（休　　憩）
3）G. カサド：無伴奏チェロ組曲
4）L. v. ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第3番　イ長調　作品69

プログラムは最初と最後にベートーヴェンのソナタ、真ん中にはバッハと

カサドの無伴奏曲を配置し、シンメトリーな構成となっている。ベートーヴェンの作品は私にとってバッハと同等に重要なもので、このようなプログラムを気持ちの中に描いていたものの、単発のリサイタルで行なうとすれば、一夜に2曲のベートーヴェンを演奏するプログラムは立てにくい。ベートーヴェンのソナタ全曲の演奏会なら徹底しているのだが、他の楽曲と合わせた場合、2曲のベートーヴェンは聴衆にプログラムの変化に乏しい印象を与えがちになり、またシリアスな2曲の作品に接する集中力をも要求することとなる。というわけでなかなか実現させにくいプログラムではあるが、今回は6回シリーズという企画で、各回にそれぞれのテーマを持たすことが可能となり、第2回はバッハとベートーヴェンという、バロックおよび古典派の作品を主体的に演奏するというコンセプトを打ち出し、前記のプログラムを決定した。ベートーヴェンの第1番は初期の作品、第3番は創作の熟成が見られる中期の作品である。バッハは第1回の折りに組曲第1番を演奏し、以下順を追って演奏していくので、この度は第2番である。また20世紀のイタリアの作曲家兼チェリストであるガスパール・カサドの無伴奏組曲は、今回のバロック、古典派音楽の色彩が強いのでプログラムに変化をもたすために合わせて組み込んだ。

チェロ奏法を習得する上で、バロック、古典派の作品を端正に演奏する技術を求めることはきわめて重要である。第2回はそのことをもう一度肝に銘じ、研究を重ねて発表する試金石とした。今後も模索をつづけていくつもりである。